

## 地銀の預貸利鞘と市場構造

神戸大学大学院 石橋 尚平

本稿では 1999 年度から 2003 年度におけるわが国の地銀・第二地銀の預貸利鞘を分析する。同時期はわが国の金融機関が不良債権処理に追われている時期で、地銀・第二地銀が負担した信用コストも急増しており、信用コストを預貸利鞘の拡大でカバーすることも困難な状況にあった。一方で、2002 年 3 月に金融審議会は、大手行には不良債権処理の数値目標を示す一方、地域金融機関に対してはリレーションシップ・バンキングの本来の意味での機能を強化することを提唱している。リレーションシップ・バンキングは、顧客との間で親密な関係を長く続けることにより、顧客についての蓄積される情報を基に営業を行うことであるが、果たして、信用コストの預貸利鞘へのプライシングの適性化とリレーションシップ・バンキングの機能強化は矛盾することはないのだろうか。

パネル分析によって、預貸利鞘 (LDM) を被説明変数として、地銀・第二地銀の **Fixed Effect** を求めたところ、九州や四国に本店のある第二地銀の **Fixed Effect** が高くなる傾向があることが分かった。この理由を調べるために、次に **Fixed Effect** と各銀行が地元とする都道府県内の市場構造とのスピアマンの順位相関係数を求めた。その結果、規模が小さい銀行が支配的である市場では貸出金利が上昇し、さらに小さい規模の銀行が支配的である市場では貸出金利が低下する傾向があることが分かった。これは、Berger, Rosen and Udell(2001)の実証結果と整合的である。

また、預貸利鞘から事後的に発生した信用コスト比率を控除した値 (NetLDM) を被説明変数として **Fixed Effect** を求めたところ、地元での貸出金ならびに預金市場での競合が激しい大都市を本拠地とする地銀・第二地銀の **Fixed Effect** が高い数値を示す傾向にあることが分かった。この理由を調べるために、被説明変数を LDM とする場合と同様に、地元の市場構造とのスピアマンの順位相関係数を求めたところ、符号のほとんどが逆になった。そこで、地銀・第二地銀の地元へのコミットメントの度合いを示す指標との順位相関を調べた。その結果、地元の残高シェアが低い、地元での事業の集中度が高い地銀・第二地銀の **Fixed Effect** が高くなる傾向にあることが分かった。分析の対象とした年度においては、東京・大阪などの大都市のある都道府県への資金流入が高まっていることを考えると、都銀や他の地銀・第二地銀と激しく競合するような大都市のある都道府県を地元とする地銀・第二地銀の **Fixed Effect** が高いことが分かる。

以上の結果から、預貸利鞘は地元の市場構造の影響を受けるが、競合が激しくとも地元での事業の集中度を高くすると、NetLDM を高くすることが可能であることが分かる。これはリレーションシップ・バンキングの機能強化による与信能力の拡大効果によるものであると考えられる。